

若槻家之墓 釋待齡居士

献燈 孝子從七位勲六等

若槻 敬

婦 奈美子

献燈 孝孫三七位 若槻禮次郎 婦徳子

從七位勲五等切五根故陸軍歩兵中尉

至誠院釋齋雄居士 熊谷齋郎墓

大正九年一月三十日死去

故陸軍一等靴工 田中虎市墓

明治三十八年六月二十一日清國鉄嶺に於て陣歿す

故陸軍歩兵伍長 角田 豊墓

昭和十三年三月十八日山東省南部臨城附近東箇山の激戦に戦死す享年三十一歳

献燈 第十一中隊一同

### 四六 光壽山本誓寺

豎町眞宗本願寺派本尊阿彌陀如來

松本家之墓

辞世 石をかむり花見ぬ穴へ隠れん坊

寸八

御佛の誓ひのふねに法のうみはみもしつかにわたる彼の岸

惠十

勝部家累代之墓

辞世 現世をいさ五行かむとこしへにやすき黄泉のたひそ嬉しき

星洲

故陸軍歩兵伍長 竹内徳重墓

昭和十三年三月二十八日山東省台兒莊に於て戦死す

故陸軍歩兵伍長 三代秀夫墓

昭和十三年十一月二日南京病院にて戦病死

### 四七 雲龍山徳専寺

雜賀町眞宗大谷派本尊阿彌陀如來

陶工雲善碑 常眞老人今泉雄作書

大正九季正月二十七日百年週忌建之 發起人七代孫土屋定好外曾孫三名

略歴 松江横濱町の土登師善右衛門の子初代善四郎安永九子年四月晦日出仕不昧公

の厚遇を受けずも亦善四郎と稱して父子兩工共に「うつしもの」に長じ雲善（出雲善四郎の義）の銘を以て古茶碗各種をうつした物頗る多い。不昧公が諸大名に土産物として贈與の物は此工の作であつたといふ。天明六年丙午正月十二日病死。

諏訪部家歴代の墓  
寛政院釋眉綱居士 諏訪部眉綱

安政三丙辰四月六日歿八十九歳

山田家四代山田忠左衛門の五男寛政字子柔初め山田長之助と稱し後諏訪部三郎右衛門の義子となりて次郎右衛門と改めた。石橋町に私塾を開き和學漢學算道を教授し文政元年頃尤も隆盛であつたと。姿勢勇壯眉濃きを以て眉綱と號した。平素養生に留意し酒色を遠ざけ飲食を節し以て八十九歳の高壽を享けた。

民生於三事之如一父生之師教之君食之非父不生非食不長非教不知

八十有八歳 眉綱 印

尤から暮む八十の年ぬる我が齡君も幾千代万律世や金ん

祐子様は ほんけ 隠居

凡長生多らん事を欲する人は常養生第一は可心懸事勿論に儀に小不養生なるとき、

は天年を経終る事かたかるべしいかんとなれば天より命せらるゝ齡を私心を以て求めて短くす是則天性を滅すと云ふべし嗚呼惜むべきの甚哉古人云壽を上中下三段に分ち六十歳を下壽とし八十歳を中壽とし百歳を上壽とす養生よければ中壽を保つべし上壽は氣脈ともに健にして其上養生を能するときは是亦其場に茂至るべしと愚拙此語を聞しより就中養生に心つけ小属此諫よむ小武當年八十一歳子罷成小養生道酒色を遠け飲食を節するを第一とすべき事と心得小孟子曰苟得其養無物不長と是亦養生心得し一端ならん歎

申二月 ほんけ 隠居 眉綱

故陸軍三等看護長候補生 鈴木孝之助墓

明治二十八年九月七日歿

碑文入なるも判讀不能 高橋茂藏撰 明治二十九年八月二十一日

### 四八 金華山洞光寺

新町曹洞宗本尊釋迦牟尼如来

覺量院釋順道居士 藤岡雄市墓

嘉永二己酉年十二月五日行年三十

藤岡雄市數學の天才あり當時江戸に於て名高き内田寛齋に親しく教を受くること能はざるを以て通信教授を請ふ年二十餘にして江戸勤番を命せられて東上し其蓋與を極む此頃外船の牧邊土に來航するもの相繼ぎ海内物情騷然たり雄市幕府の命により東京灣の測量を爲し圖を製して之を獻す。製圖尤も精密好評を博す。其著算法圖理通は今の微分積分に相當するもので弘化三年頃の出版にして此時雄市二十五六歳頃なりといふ其書の序に東海觀老人は「洵予門之魁傑也」と贊し惠川景之は其跋に「以豪邁之質英傑之識自究數理之奧妙殊兼通古今之層象」と識せり。又澤登量地速成(弘化三年版)量地孤度法便覽、算法珊瑚解、經緯簡儀圖說用法、量地新書、星學須知、陸砲訓練、航海測量法等あり。雄市又其研究に係る「排内容入圖算題」を顔面とし岩坂村屋上寺本堂に掲ぐ蓋し算道の玄を極めたものと、雄市は唯數理測量に長せるのみならず又銳意蘭學を修め三十歳を以て歿す(跋史)

安齋野柳川先生之碑

柳川彌三郎安齋

寶曆十一年辛巳冬十月二十二日享年六十五

碑文摩滅不判明、諱彌三郎號安齋、兵學者として高名、批源截撰、海野叔明書

遼閑院黃龍淡水居士 第九代目柔術師範役 梶川純太夫橘一成入道淡水墓

弘化四丁未年十二月三日

義光院清譽見忠居士 第五代目柔術師範役 井上九郎右衛門允克墓

寛政十戊午年二月十七日

隆徳院紫山義興居士 第八代目柔術師範役 石原左傳次中和墓

文政五壬午年九月十四日歿

藩士岡九兵衛の弟性質剛健にして大膽十三歳の時親の命により出家となり鶴洲寺に上つたけれど僧となるを厭ひ夜抜けて戻つて來た。一心に武技を研き殊に柔術を鍛錬し初め藩の師役雇となり文化元年石原小平次の遺跡百石を下され師範本役と爲り勤役二十一年高弟に柘植小源太、高尾藤太等

不動院廓心柔英居士 第十代目柔術師範役 石原左傳次中從墓

文久壬戌年九月十八日行年五十四歳

梶川純太夫の彼を引継ぎ藩の柔術師範として有名で身長五尺八寸体量三十七貫大剛無双の武士にて江戸吉原蕨の者との衝突事件に剛勇を振廻した傳説がある。彼年彼の松江侯廢立の陰謀事件廣瀬支藩の家老片山主膳に組み込まれた嫌疑で牢死の不幸を見

村松將監之墓

家中に佐藤平兵衛（知行七石）といふ剛直の士あり常に村松將監の驕奢横暴の振舞を悪んで居つた慶或時村松家より佐藤方の松の名木所望の一件から平兵衛大に立腹し故意に將監の意に逆つた為め平兵衛父子は「腹を命せられ妻子判殺の上深く自及一家断絶した。其後村松家に言凶ある郎には今以て怪異かあるとの事又平兵衛の墓所は極樂寺にて將監の墓所は隣りの洞光寺にある事として夜更けて平兵衛墓所より火の玉出て、將監の墓へ参る由世俗に申傳へた（見聞記）

有濟院大興乾徳居士 初代 松本歡次郎墓

明治三十七年一月二十二日（緑後袋章）

真光院釋來菴廣覺居士 從五位勳五等廣學士 中村鐵太郎墓

大正五年三月二日卒去

祖山鉄石居士 栗田 幹墓

明治三十八年十一月十六日歿

傳峰雪映居士 石原久之助墓

昭和七年一月六日亡

興憲院殿睡應遊仙居士 詩人 勝田千之助墓

大正二年一月十二日行年七十四（號睡仙）

凌雲院興山玄陸居士 醫師 田部辰次郎墓

大正三年十二月九日

蓮道院釋宏心居士 藤岡宏一墓

昭和十三年三月十日行年六十七歳

郡書記 縣屬 知事官房主事 通摩安濃鏡川の郡長、正七位勳六等 縣農會幹事の略歴を有す。元中學湖西同窓會員として予等と親交あつた。家素と西光寺壇徒なるも特に洞光寺に葬る。

倚徳院合齋常道居士 澤野崎輔墓

明治三十六年二月六日享年七十六

文兵衛次男文政十一年戊子四月十三日出生少時業を兩森精翁に受け安政元年江戸に出で昌谷精漢、安積良齋に就て精業、歸國後家塾を聞いて子弟の育成に従事中藩命に由り文久三年頼支峰、藤澤東賊に就て講學する所あつた。明治元年卒伍より身を

起して新藩士の格に入り其後譜代の士に班せられたるは偏に人物教育上の効勞に出る者である。藩主及世子の侍講をつとめ又藩學修進館にては訓導兼教導尋で皇漢學大助教となる。維新後學制改革と共に小學校教師、教員傳習校教師、師範學校訓導中學校教諭と漸次重用せられたるも明治十五年退職後は専心子弟の教養に任じ居。歿及び文節者より表彰せられた教育功績者である。

太白菴石清龜齋居士 荒川望之助墓

明治三十八年十月十四日享年七十九歳

文政十年丁亥四月二十五日松江堅町に生れ字は明生通稱重之助、龜齋、石清、太白菴齋、施齋などの號がある。幼より穎悟夙に繪画彫刻の業を好み十四歳の時福島彌藏に彫刻を高見且齋に書及び國學を飯島華岳に繪画を佛師加藤佐織に琳瑯彫刻を學習したか之れ丈では満足せず更に白銀屋谷寛壽に就て金工の技を磨き尤も奈良屋利壽に私淑する所多かつた。一方に又東西の文明と歩調を同じうてんとて窮かに究理の學を研究し東京に出て、横山松三郎に洋面を學び又寫眞術の研究を遂げた。明治九年駿廳の命にて自己發明の螺族社掛けの學校用大算盤を製造し技能益々認められて松江病院の機械研師縣康庵を命せられた事もあつた。明治十年第一回勸業内國

博覽會に茶櫃製書棚を出品して賞牌受領、宮内省御買上となる。明治十三年第二回目には壽老の扁額を出品して褒賞受領、明治二十三年第三回目出品は日蓮尊者教化の圖にて之れを宮内省に献納して銀盃を下賜せらる。翌年四月新古美術展覽會に額面を出品して一等賞となる。次いで水國シカゴ市萬國博覽會への出品物箱田姫の神像は優等賞となりて名譽を海外に博した(此の神像は二十七年六月出雲大社に奉納)明治三十三年巴里の世界大博覽會へ神功皇后三韓征伐の額を出品して銅牌を受領した(其後竹天村平瀆八幡宮に奉納)此外新意匠を凝らした製作物は枚擧するに遑かない。

故陸軍近衛騎兵伍長 和田榮之進墓

明治十六年八月念七日病歿於東京葺麻布岸町大安寺

故陸軍歩兵大尉從六位勲五等伊藤金三郎之碑

明治二十九年七月五日臺灣嘉儀にて陣歿す

故陸軍騎重騎卒 立原龜太郎墓

明治三十三年九月十日天津兵站病院にて死す

故陸軍歩兵大尉從七位勲五等切五級 永井成太郎墓

明治三十七年七月二十四日大石橋にて戦死す

故陸軍歩兵伍長勲七等功七級 佐々木兵之助墓

明治三十八年三月一日満洲李家窩棚附近にて戦死す

故陸軍歩兵一等卒 朱脇敬次郎墓

明治三十八年三月六日奉天會戰二台子にて戦死す

故陸軍歩兵上等兵勲八等 渡部壽一郎墓

明治三十九年二月十一日日露戰役に重傷を受け解除後歿す

故陸軍歩兵勲八等 佐々木甚太郎墓

明治四十三年五月五日

故陸軍歩兵中尉從七位 清水重次郎墓

勇道院重岳義禮居士 明治四十四年十二月十八日卒

故陸軍歩兵少尉正八位勲六等 大畑準次郎墓

勝善院釋勇哲居士（西本願寺より院號授與） 大正十年三月二十九日

故陸軍歩兵少佐正六位勲五等 原 豊三郎墓

豊功院三心達道居士 昭和七年二月十一日臺南に於て亡

故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 田淵信雄墓  
 昭和七年八月二十四日黑龍江省綏東に於て戦死す  
 討死の君かいさをはときはなる松江のさとの響なりけり 寒 晴  
 同年八月二十七日

故陸軍歩兵伍長勲七等功七級 手銭勝郎墓  
 昭和十二年九月五日北支那西子牙鎮の戦闘に戦死す

故陸軍歩兵伍長勲八等 梶川正信墓  
 昭和十二年九月八日戦死於北支劉莊附近嗚呼春秋二十又五

故陸軍歩兵伍長勲七等功七級 田中 優墓  
 昭和十二年十月十三日戦死於山東省正莊附近嗚呼春秋二十又五

故陸軍歩兵伍長 中溝久夫墓  
 昭和十三年三月三十一日台兒莊にて戦死す享年二十七歳

故陸軍野砲兵伍長 泉原二三男墓  
 昭和十三年十月三十日

四九 蓮池山極樂寺

松江元山浄土宗本尊阿彌陀如來

宗興院釋靜清不退

中興五世從五位勲四等 因濟蓮兵衛真清墓

大正八年十二月十七日享年七十歲

觀靜清又嘗購 衆議院議員當選六回第一次第二次第七次第十次第十二次第十三次

地方實業家として又社會公共事業家

浄國院釋起雲不退

中興六世正四位勲三等 岡崎國臣墓

昭和十一年五月二十日歿享年六十三

本姓勝部東京帝國大學法科卒業衆議院書記官長 東京株式取引所長等勤務 松陽新

報社長

原家累代之墓 清徳院高堂義潔居士 東京府西多摩郡長從七位勲七等 原林之助墓

大正六年四月二十六日

松宮院慈譽慧眼居士 醫師西川水次郎墓

昭和十三年五月八日行年六十九歲

予等と同じく殿町小學校校友會員

幽玄庵釋義空居士 武部、墓

墓誌入行るも殆んど摩滅事蹟不明

安政丙申秋八月 磐峰沙門略然誌 孝子武部權重守典建之

快樂庵釋泥洹守典居士 武部伴六守典墓

明治十四年六月六日

辭世 遊ふ蝶光頼螢や輝の聲

蛸蟬も我も夢の世の中

和田家之墓 和田 綱 (元雜質町三丁目居住)

予の附屬校時代の同期生和田辰之丞の祖父にして著述論語鈔、我得餘事、綱の自傳に由れば、予松本要七第三子二歳之時先子(稱惠助祖父力租大坂人)被養十有四而刀吏史事鞅掌加之賦稟薄而不能苦學長犬馬之齒六十有三乞官而讓事於男宗元築環堵六室絕客借居初竊以力立功非時也速忘非亦所及也盡力六經使童蒙不誤其義吾分而已

解經之編蓋筭羅壬子之災念為烏有殆天意歟不使流息也遺餘僅數卷鏝梓投童蒙今逾耳順不敢厭倦戒得之餘為重蒙筆之老將知卷及之有益乎否  
佐藤平兵衛墓

當寺にて切腹し埋葬の墓所も其の後年月照寺附屬地所内へ移轉となつた。  
故陸軍歩兵少尉正八位勲五等

至誠院元山亮義居士 田中亮次郎墓

明治三十八年十月二十日韓國元山に於て歿す享年三十六歳

故陸軍歩兵上等兵勲八等 田中忠之助墓

松江歩兵六三聯隊本部附軍旗護衛兵 昭和七年十月二十日滿洲富錦にて歿す

第十一中隊長石井富太郎歿燈二墓

故陸軍歩兵伍長 鈴木幸一墓

昭和十三年四月七日

### 五〇 鏡湖山圓成寺

松江分元山臨濟妙心寺派本尊釋迦牟尼如來

堀尾山城守忠晴之廟

圓成寺殿前雪隱兩洲太守拾遺賢世尚大居士

寛永十年癸酉九月二十日三拾五歳

嗣子なきため國除かる夫人真平氏（奥平家昌の女法號雪松院殿長天正久大姉）は奥平家へ復歸された。忠晴卒して後六年方泰の子方成（祖馬守）長崎より來つて松平直政公に仕へ禄三千石を給せられ子孫相繼いで今に至ると。初め堀尾吉晴祖靈の爲めに富田の城安寺を洗合山に移し瑞應寺と改め忠晴卒去後又瑞應寺を意宇郡乃木に移し圓成寺と改めたものである。

最勝院殿天叟世光居士 堀尾祖馬右成墓

寛永二十一年甲申九月十四日年六十九

堀尾祖馬は鉄砲早人組に屬し三千石を受け大阪冬の陣には勲功を建てた堀尾家斷絶後寛永十五年戊寅七月六日松平直政に召出され新地三千石。此人の手記ならんと思はる。古記は有力の材料である（取りに堀尾古記と名く）。

慈堂良慰大姉 堀尾圖書殿北堂墓

寛文七年丁未七月二十二日行年八十四歳



堀尾祖馬家累代靈位

宮次氏先祖代々佛

宮次郎藏諱豊芳文政庚辰（三年）若殿にして作事小吏となりて西（八年）人參方小吏に轉す。總監小川某に従ひ諸藩を巡察せしめ數々崎陽に至り大に功あり嘉永辛亥（四年）巨砲の製造に精しきを以て其職を兼ね官爵稍々進安す。安政丁巳（四年）功を以て始めて新番組士となり己未勘定副吏となる。文久辛酉（元年）病を以て職を辞す癸亥（三年）累年の功を以て筆頭格に賞せらる十月三日病重くして歿す年六十有三配熊谷氏一男三女を生む男を篤之丞と曰ひ嗣となる銘云事成夏邦名涉異域君子君子功不可測

文久癸亥冬十月 小川蛤記其大妻 男篤之丞建之

強弱道確居士 力士 小野川調右衛門墓

楠逢郡國富村小柳姓之産 明治三十年五月十一日松江にて歿す壽七十八

判事補田中君之墓

碑文入 嗣子竹三泣血謹誌 明治十三年一月十六日歿享年五十二

故司法省十七等出仕内野左五郎之墓

明治十四年六月二十八日死（判事連氏名列記）

深山院殿恭學文齋醫士 森本文齋墓

大正二年五月二十三日歸幽

明治十一年佐藤於菟に就て醫學を學び十三年一月内務省醫術開業試験に及第したの  
は年二十二歳の時である。十七年東京に遊學して清水柳太郎櫻井郁二郎に就て婦人  
科産科學を修め更に仙臺に入つて醫學士佐々水文蔚に従ひて醫學を研究し歸國後は  
開業醫從事その傍ら産婆看護婦養成に努力された。

伊藤家歴代之墓 伊藤博敏（辯護士）

本姓太田伊藤家を継ぐ通稱氏藏後に博敏と改む明治初年代言人となる。茶道繪画を  
愛好し西號停雲傍ら詩歌を嗜む

昭和六年十二月二十二日歿享年九十八歳

雲心院華嶽幽香居士 小原房五郎墓

大正五年一月一日享年五十六

小原流盛花の元祖六合軒雲心の事である。曾て日本美術會の彫塑部員として畏くも  
昭憲皇太后御買上の光榮を得た人。

六合軒妙花香雲居士 第二世 小原光雲墓

昭和十三年八月十三日行年五十九

現代盛花界の巨匠本名光一郎、十一歳の時父と共に上阪し今日の大を築いた。常に盛花と花器と床の帷物との三位一體の調和を心掛け花器類も出雲焼珠に袖師焼を利用された。特に御土愛精神の強い事は松操高等女学校と松江市公會堂の建設とに全参万圓を寄附された事を以ても知るべきである。

義徳院節菊菊徑居士 高橋義比

昭和十三年二月十九日行年八十三歳

教育界から郡書記に轉じ明治二十二年松江に市政が布かれると初代市長樞同世徳の下に助役として明治四十四年迄補佐し市長が代議士に當選して辭職せらるゝと其後を承けて二代市長となり大正十四年退職迄前後三十七年間市政の爲め努力された。漢詩を善くし菊徑の名世に知られ地方詩壇の雄着であつた。

故陸軍歩兵上等兵數八等功七級 福田豊吉墓

明治三十八年三月一日清國柳條口にて戦死

故陸軍歩兵伍長 新宮信雄墓

昭和十三年四月二十六日山東省魯兒莊附近蘆城店の激戦に於て戦死享年二十四歳

第十一聯隊第二大隊長心得陸軍大尉正七位 曾彌忠一神靈

明治十年三月九日戦死

豊陽侍醫林家初祖歴世親等家族四拾九神靈合祀碑

當林家は松平直政公の侍醫頭で寛永十五年信州松本から隨從代々侍醫禄高三百石又は百五十石拜領す松江東茶町に居住初代より中興迄佛式を以て専念寺常深寺に墓があつたが明治十九年後祭田成寺内神道墓地に転る。代々御殿小兒醫と稱する家也。雜賀本町に轉住居す 隆齋之紀

### 五一 式崎山善光寺

市外乃水村時宗本尊阿彌陀如来

松江城南彌陀靈場

願 面

式崎金池善光精舎

文化式と丑閏八月日

源治堀惠商書

不昧公之筆

滋心瀧院殿法橋源性大居士在々水四郎高綱墓  
墓誌入 當寺三十世其阿上人懷澄記之

寶曆十二年壬午天孟夏下弦

乃水大將一家遺髮塔

大正四年五月

元帥 伯爵 東卿平八郎書

塔誌 柱 玉水正之謹識

乃水大將祠堂并に寶物庫

昭和十年七月十三日竣工

護國院殿精阿純忠希典大居士 享年六十四

秋芳院殿正式貞烈靜心大姉 享年五十四

明治四十五年九月十三日殉死

淨光院殿安譽勇心以桑居士 元郎長正八位 六代目 大野義就墓

明治二十七年十二月九日

隆松院殿仁阿文修居士 醫師 佐野文修墓

源德院精阿又新居士 醫師 佐野又新墓

大正十四年七月十日

力士鉄の戸文四郎之墓

明治十六年三月二十日

故意宇那東部牛馬賣買組合頭取安達本重碑

安達本重之墓

明治四十二年九月二十五日行年八十四歳

貞阿道徹居士 飯進教師 多久和長次郎墓

大五輪塔 原源藏祖完 原 勘解由墓

更に大なるもの三ヶ所に立って居るが誰の墳墓にや

芭蕉翁砂見塚 明月や行遊のもてる砂見塚

行遊は善光寺初代の住職の名である砂見塚と稱するもの江州にも一ヶ所あると

故陸軍人野津常太郎君之碑

正五位勲三等大浦兼武書 明治二十八年三月有志建之

故陸軍歩兵第二十一聯隊第七中隊歩兵一等卒 多久和良三郎墓

明治三十三年十一月二十五日天津兵站病院にて死す行年二十七歳

第五師團第二十一聯隊第五中隊機關砲隊第三小隊故陸軍歩兵一等卒 周藤房太郎墓  
明治三十八年八月二十八日薨二十三歳

### 五二 乃水村松江共同墓地

故陸軍山砲兵伍長 青戸高朝墓

大正十五年十月二十九日歿行年四十歳

故陸軍歩兵上等兵勲八等 糸原金三墓

昭和八年十一月一日滿洲吉林省磐石縣煙筒山驛橋内に於て全身爆創に因り歿す

故小川茂弘之墓

昭和十三年九月二十九日歿享年九十歳

キリスト信者今より後義の魁わが爲めに備へあり

金光教信者古浦家之真城 三世古浦壽助建

### 五三 床几山公園

故從五位下左京大夫青砥信重之墓 文祿四年

故從五位下河内守青砥親昌之墓 天明七年

故從五位下近江守青砥建平之墓 嘉永七年

故縣社賣布神社々司青砥建行之墓

大正八年五月十一日歿七十五歳

### 床几山碑

床几山在松江之南慶長五年十二月堀尾吉晴封于出雲隱岐其子忠氏與父及老臣議欲移  
就于末次極樂寺山相與至此地臨湖床指畫地無幾忠氏卒議中止吉晴憐之十二年冬遂  
決意起工五年而成移治焉是松江之濠鶴也邦俗謂湖床床几故名焉松江人山本信太郎等  
相謀請書其事于石乃記以表之

明治四十四年九月十有二日

陸軍少將從四位勲三等功四級熊谷宣馬撰文并書

明治二十七八年歿後銅佛

碑文入 明治三十二年十月十三日 妙法院門跡大僧正村田寂順撰

俳人山内曲川記念碑

松島も見れば故郷の湖涼し

明治三十八年五月

釣年庵社中

男爵若槻禮次郎之銅像

閣下生我御幼學維賢貴長入帝國大學釋褐大藏省累進大臣遂為臺閣首班又以首席全權  
大使列倫敦會議依功授男爵加閣下實可謂一代偉人也於是有志相謀建立此像使人有所  
欽仰感奮焉

昭和九年六月吉辰

渡部寬一郎撰書

故佐々木文府君碑

篆額 海軍中將從二位勲一等子爵樺山資紀

宮中顧問官兼中央衛生會會長正四位勲三等長與尊齋撰文 從七位市川三兼書

明治二十七年十一月

(略歴) 青森縣弘前人諱元亨曾て松江醫院院長後海軍大軍醫、十島艦軍醫長明治二十  
四年十一月三十日瀬戸内海に於て外國船と衝突の際沈没溺死年四十一歳贈正六位  
光兩兩森君碑銘(省略)

篆額 正三位勲三等男爵十家尊福

厚知

草場 康撰

正四位勲三等 巖谷 修書

略歴 諱諫字君恭通稱諫三郎號新齋、鶯山 老鶯又光兩、文政五年五月二十二日出  
生藩士妹尾清左衛門の第三子である兩森の姓を肩すことになつたのは元治元年備學  
優秀の故を以て初めて家禄百石を給せられ同時に藩主定安公の生母里方の姓兩森家  
の祭祀を承けしめん為めであつた、幼より俊敏周詳神童を以て稱せらる天保二年始  
めて藩校明教館に入學し尋て儒者日村寧我に師事して其家塾學舎に學ぶ、天保九  
年十七歳の時浪華に赴き先づ藤崎小竹の門を叩き次に藤澤東岐の學舎に遷りやかに  
其塾長となる、病に罹つて一旦國に歸られたが更に雄志を抱いて江戸に入り林大學  
頭に師事し佐藤一齋安積長齋等と交遊して學業大に進んだ天保十四年より慶應三年  
に至る間は國步極めて艱難の際であつたが嘉永四年には新に養正塾を聞いて育英に  
従事し或は攘夷に關する奉答建白或は西井侯の所望にて姫路學問所に講義し京都に  
居られる時は徳大寺卿及松平春嶽に謁見し、征長總督軍議の席に参列し諸藩へ使者  
となり又修道館儒學總教授に任せられて藩侯並に世子の侍讀と爲り長州征伐に出陣  
する等東西奔走の有様であつた、維新前後に於ては益々其才學を重用され政事参謀  
となつて藩政に参與し公議人に勅命せられて公議所に出仕し雲藩の兩森として能く

経綸の才を縦横に發揮されたが病弱の爲めに江都に在留を許さず公議人を許退された。歸藩後官を許して法吉村鷹谷に隱栖し明治二年十月儀禮暢園村田寂順等の勸誘に由て梅縫郡平田に轉住され此時名を改めて精翁と呼稱された。五年九月秋部省の辟に應十六年三月日御崎神社官司に任せられ傍ら教職を兼ね七年二月國幣中社嚴島神社權官司に轉補せられ尋で廣島縣權大属に任せられ尋で大属と爲られたが後官に合はず八年出雲平田村に戻り其居を有所於歸村莊と名けられた。此頃村田寂順の招請を受けて京により各寺院に講書の傍ら十八史略校本、日本政記別記及正談、阿羅語講義等を著述された。滞在三年重患に罹り病癒えて漸く平田村に歸養明治十一年十月新に亦樂舎を築して幾多の門生を集め經史を講述されたが十五年九月十五日に病歿された享年六十一平田樂師山に葬られ諡號精翁<sup>シヨウウ</sup>進別彦<sup>シノベノヒコ</sup>命は千家尊福の撰、又碑面の刻字は千家尊慶の筆になつたものである。

師の教を受けた門人には澤野合齋、桃節山、永田奉齋、高齋融齋、坂本蘭忠、河合篤敬、北島主鈴、小野令節、村田寂順、入江文郎、千家尊福、渡部翠園、黒田青龍、梅香雪、須佐廣主、北尾次郎、千家尊弘、平賀樂之、千家尊紀、須佐清彦、忌部伊佐丸、横山真牙、千家尊慶、村上琴屋、松田沁雨、横山耐雪等（其外省略）

澤野合齋翁碑

篆額 伯爵 松平直亮

勅選議員正四位勲三等文學博士重野安穩撰  
勅選議員錦旗祗候正四位勲三等金井之恭書

明治三十六年十二月

諱修字詢叔通稱修輔号合齋（首略）

銘曰 雲山蒼蒼湖水瀾瀾水養麟介山殖松梓君子育英此山與水成德俾材和家之利銘幽  
有辭垂千萬祀

（明治三十六年二月六日歿享年七十六歲）

文齋森本君碑

篆額 京都帝國大學總長從四位勲三等醫學博士荒木實三郎

京都帝國大學助教正六位文學士

鳥根縣立商業學校講師從七位

大正三年甲寅九月

（大正二年五月二十三日卒享年五十五歲）

鈴木虎雄撰  
毛利八彌書

五四 床几山西田中離墓地

松山家之墓

正定院釋雲外居士 松山虎次郎

昭和三年四月二十三日行年六十一歳

妙蓮院釋頓燈大師 虎次郎妻フサ

大正三年九月二十四日行年四十六歳

本姓錦織出で、松山家の入婿となる附屬小學校以來予の學友、松江病院書記、松江中學校書記、稅務屬、小林區署長勤務、最後は神戸市に就職し其地にて病歿、妻フサ子は多年小學校訓導勤續

五五 土棺阪之墓地

在友軒釋松蘿秀道居士 袖山左右衛門墓

慶應二年丙寅八月五日

非人にて又武道にも通達す、遺吟二

名月や柱のかけの硯箱

袖蘿佛

もてなしや花に横野の亭主ふり

奥村家之墓

奥村讓は若槻男爵の實家の兄にて郡書記等勤務

全蓮院釋白峯居士 正六位 袖山金次郎墓

昭和二年一月三十日 (警部 郡長等)

五六 養王山菩提寺

雜賀町本門宗本尊十眾勸請曼荼羅外七

隨信院了源日通居士 大森仁右衛門墓

寶曆四戌十月十六日 墓誌所々不明

大森仁右衛門夫婦之墓在菩提寺境内余家世祀之(以下不明)會隨信院百五十回忌、  
、、建之且記其由 九代 渡部寛一郎

明治三十六年十二月四日

大正院昌訓居士 辯護士 坂本昌訓

大正七年二月十八日行年六十五歳

有心院京正日辰居士 正七位 内田正矩墓

佐藤勝太郎之墓 多手孫立中學校教諭

昭和八年二月 日享年六十七

故陸軍憲兵上等兵 中井原次郎墓

明治二十八年十一月十日臺灣守備隊病院にて病歿行年二十二

故陸軍歩兵少尉勲七等功六級 梶谷宇太郎墓

明治三十七年九月三日盛京省遼陽に於て歿す

### 五七 大黒山安樂寺

石橋町赤崎本門法華宗

### 五八 石橋町赤崎共同墓地

元祖泰賢院殿雲兵宗龍大居士 從三位勲三等 平塚忠之助墓

昭和七年八月建

足立家代々之靈位 足立敏太郎

静岡縣立島田高等女學校同窓會獻燈

昭和八年四月十八日建之

本縣師範學校卒業、小學校長 松江長野飯山等の縣立中學校教諭校長勤務最後は靜

岡縣立島田高等女學校校長として又同縣の縣史編纂に従事せられた。明治二十三年予

か通摩安濃郡大田高等小學校在勤の頃同校主席訓導にて校長事務取扱であつた。

故大阪控訴院判事正五位勲六等岡田多四郎墓

大正十三年四月二十四日 (キリスト教信者)

從五位勲五等津村一朗之墓 (キリスト教信者)

大正三年一月十一日永眠

故陸軍三等主計正從五位勲四等渡部龜三郎墓

正八位勲七等志谷録次郎夫婦之墓

大正三年二月九日島根縣屬官中に卒す

福岡氏歴世之墓 明治四十五年三月二十一日改葬合祀

雪光院釋成徳居士 福岡世徳



昭和二年一月三十日行年八十歳

辯護士・松江市初代市長 衆議院議員一回（第十一代）長子法學士祿太郎多年上海  
同文書院教授勤務中逝去

松江音哩學校創立者福田與志子之墓

大正元年十一月二十八日眠

昭和十年十一月設立音哩學校庭内に記念碑建立

昭和十年秋為創立三十周年記念建之

福田女史頌德碑 横四柱勲四等錦織竹香書

淨安清心居士 神田忠篤墓

碑文入 神田忠篤通稱龜次郎本片山氏能義郡上小竹村之産松江士族神田林市の養嗣

となる云々年三十一 友人中村英撰 藤脇善政書

勝部龜主之奥郡城

昭和二年三月十五日歸幽享年六十二歳

武徳院勇譽蘆風居士 昭和五年七月廿九日

飯道教師誦曲指導 蘆田長一墓

瑞光院釋真道居士 伊藤蔓之助墓

大正十一年一月二十六日行年六十七歳

予が初めて鳥根郡赤庄村小學校教員在勤の頃同校の校長であつた。

林原武雄之墓 昭和八年三月二十七日歸世

昭和十年五月三日鳥根縣觀光協會は藤原長江關屋敏子と合同追悼大演唱會開催せり

此此碑を建立して靈を慰む。

松陽新報社記者にて音楽の鼓吹者であつた。

陸軍歩兵少佐從六位勲四等 工藤才次郎墓

大正十五年十月十五日七十五歳永眠

故陸軍衛生伍長勲八等功七級 伊藤章豊墓

昭和十二年八月二十二日北支長城線戰闘に於て歿す。

故陸軍騎重兵上等兵 舟木安隆墓

昭和十二年十二月十七日河北省正大線頭泉驛戰闘に歿す行年二十六歳。

故陸軍歩兵伍長勲八等功七級 古瀬 祥墓

昭和十三年一月五日山東省晏城野戰病院に於て戰傷死享年三十六歳

故陸軍歩兵

水村禮二郎墓

昭和十三年三月三十日台兒莊城内に於て戦死す年二十八歳

故陸軍歩兵上等兵

竹内啓藏墓

昭和十三年四月二十七日山東省台兒莊北方邵家庄にて戦死遊年三十歳

故陸軍騎重兵上等兵勲八等功七級 祝 典夫墓

昭和十三年十月二十日北支東口南附近の戦闘にて戦死享年二十四歳

### 國學者真野家神葬墓地

西津田町笠森下

松江縣大属真野大丈之墓

明治四年七月二十五日於東京歿

故大教正真野義盾之墓

大正十五年二月二十一日

真野太郎之墓

明治四十四年七月九日

### 五九 水 乘 院

西津田町日蓮宗 寺院も禮家もなし。土地の人は「ふもだ」と稱してゐる。

### 六〇 法 隆 山 常 喜 寺

西津田町曹洞宗華嚴釋迦牟尼如來

有機院厚道至誠居士 賣豆紀武次郎墓

明治三十年八月三十一日

村落の寺院は墓地散在の爲めか戦死軍人の墓見當らず。以下同断

### 六一 法 龍 山 善 福 寺

西津田町臨濟南禪寺派本尊釋迦牟尼如來

聖徳院寛道良仁居士 丹生谷柳之助墓

明治三十六年十二月三十日

予か明治二十三年通摩安濃郡大田高等小學校在勤の頃、隣接の大田町尋常小學校長

再生谷柳之助は慶長参人て其子一は生徒であつた。此人の墓がこんな所にあるとは意外

### 六二 長福山禪覺寺

西津田町曹洞宗本尊千手觀世音菩薩  
寺院と見做すべきものなく一民屋に遷すめ、無禮家境内稍廣く開運稻荷神社を以て闢えてある。

### 六三 和田山安樂寺

西津田町日蓮宗本尊釋迦多寶外五  
寺町慈雲寺の出張所、無禮家、境内廣く池もあり此迎の遊覽場所、七面大明神があつて鬼子母神をまつる世俗に津田明神と呼ばれて居る。

### 六四 雞林山長源寺

東津田町一里塚南附近、臨濟宗南禪寺派本尊十一面觀音

節山院珠榮全忠居士 立原源太兵衛久經墓

慶長十八年癸丑四月二十六日行年八十二歳

尼子家の重臣であるか此墓は無論當時の物ではなく立原家の後裔にて村内にある者が立原家の祖先として石を建て、供養を爲した者である。

### 六五 萬年山吉祥寺

東津田町曹洞宗本尊阿彌陀如来

(鷹日神社の彼方)檀家少數

以上

※

最初題名を市内墓場文學と稱したか、墓場など、申しては俗臭と嫌味とを免れんと文學などとは嗚呼かましいので恐懼した。「松都三百年末の故人の跡を尋ねて」とても呼べば名は上品ならんも所謂羊頭を懸けて馬肉を賣る様に思はれてもならす一層平凡な名を附けて「市内墓しらべ」と銘を打つたか内容は極めて杜撰な凡會である事を

395  
134

御忘赦して頂きたい。終に臨んで大方諸賢より種々御援助と御指導とを受けた事を厚く感謝します。

昭和十四年五月

文泉漁翁 藤井準一郎

市内墓しらべ 後編(終)

昭和十四年六月二十四日印刷  
昭和十四年六月三十日發行

(非賣品)

編輯者 藤井準一郎  
松江府松江市南田町二丁目一〇

印刷人 菅田幸一  
松江府松江市東本町一丁目

印刷所 黒潮社  
松江府松江市南田町二丁目一〇

發行所 藤井準一郎

395

134

昭和十四年六月二十四日印刷  
昭和十四年六月三十日發行

(非賣品)

著者兼  
發行人 島根縣松江市南田町二四ノ一〇  
藤井準一郎

印刷人 松江市東本町一丁目  
菅田幸一

印刷所 松江市東本町一丁目  
黒潮社

發行所 島根縣松江市南田町二四ノ一〇  
藤井準一郎

御心成して頂きたい。終に臨んで大方諸賢より種々御援助と御指導とを受けし事を厚く感謝します。

昭和十四年五月

文泉魚翁 藤井準一郎

市内墓しらへ 後編(終)

終

